

自己評価報告書

平成23年 5月 6日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520286

研究課題名（和文）1800年前後のドイツ文学における「感性的なもの」と言語をめぐる考察

研究課題名（英文）On "Aesthetic" and Language in German Literature about 1800

研究代表者

亀井 一 (KAMEI HAJIME)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00242793

研究分野：ドイツ文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：文学論、アレゴリー、アラベスク、ドイツ啓蒙主義、ジャン・パウル、J・G・ヘルダー、K・Ph・モーリッツ、H・v・クライスト

1. 研究計画の概要

(1) 1800年前後のドイツ文学テキストにおいて、感覚、感性の言い表しがたさかどのように言語化されるのかを分析する。

(2) 感覚や感性の伝達不可能性、ないしは、共有不可能性が意識化されてくる歴史的状況を具体的に再現する。

(3) 調査にあたって、「感性的なもの」、「難解さ」、「理解しえないもの」についての一般的な理論を参照する。

(4) 特に以下の観点を中心に研究を進める。

- ① ジャン・パウルの比喻表現
- ② ヘルダーのバウムガルテン研究と『カリゴネ』
- ③ モーリッツの経験心理学
- ④ クライストの性格描写

2. 研究の進捗状況

(1) 18世紀ドイツでは、啓蒙主義を背景とする世俗化のプロセスのなかで、死後の世界をどのようにイメージするかが大きなトピックとなっていた。ジャン・パウルのテキストを中心に、レッシングによる死のアレゴリーの更新、モリスヌクス問題、18世紀の眼科医療といった観点から、「見える／見えない」という二項対立が死後のイメージに関連付けられてゆく過程を明らかにした。

(2) K・Ph・モーリッツやFr・シュレーゲルのアラベスク論と関連付けながら、ジャン・パウルの機知を考察した。アラベスク

は、ジャン・パウルに対する同時代批評のなかでたびたび用いられたイメージであるばかりではなく、近代意識の象徴そのものだった。自律的な芸術のモデルとみなされるようになる。理性や合理性では捉えられない領域に隣接する幻想的な要素がさまざまな形で主題化されるようになったという意味でも古典的な芸術観を超えている。

(3) レッシングの『古代の人びとは死にどのような形をあたえたのか』と、それに対するヘルダーの批判を中心に、死とアレゴリーの関係を考察した。二人の議論は、古代の人びとは死をどのように考えていたのかという問いをめぐるものだったが、その根底には、本来感覚できないはずの死がどのように可視化されたのかという問題がある。「眠り」のイメージに強烈な恐れが隠蔽されているというヘルダーの主張は、後年フロイトが「検閲」と呼ぶ心的なメカニズムを先取りするものだった。

(4) K・Ph・モーリッツとH・v・クライストを中心に、描写の理論と実践を考察した。モーリッツの自律理論を敷衍するならば、言語はもはや対象をたんに映し出す透明無色の媒介物ではなく、それ自身がパフォーマーとして対象の前面に現われることになる。フリードリヒの絵画に寄せたクライストの記事からは、対象と言語の間の亀裂が明確に意識されていることが読み取られる。

3. 現在までの達成度

② おおむね順調に進展している。

(理由)

三年度終了時点で、研究計画に挙げた四人の作者について、一通りの調査をすることができたという点では、当初の計画以上の進展をみせている。また、課題としていたドイツ語による口頭発表、論文発表を実現することができたことについても一定の評価ができると思う。しかし、ヘルダーのバウムガルテン研究については、二年度以来継続的に行っているにもかかわらず、見通しのつかない状況である。また、二年度実施予定のマールバハ図書館での資料調査が実施できなかった。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 当初の計画にしたがって、四年度は、クライストの性格描写について研究を進める。特に、「意識の集中」と「放心」のモチーフに焦点をあてて、短編小説を分析する。この年は、クライストの没後200年にあたり、ドイツで開催される関連の学術集会に参加する。

(2) ヘルダーのバウムガルテン研究、モリッツの経験心理学、ジャン・パウルの機知を中心に、1800年前後のディスクールにおける無意識の表出を調査する。フロイトの研究会で論文集刊行の企画に、本研究の成果を組み入れることを検討する。

(3) 継続的に発表している「死をどのように言い表すのか」についての論考は、幻視をめぐる当時の議論をまとめ完結する。カントのスウェーデンボルグ批判とジャン・パウルの『死したキリストの宇宙からの、神はいないという説教』を取り上げる予定。

(4) (1) に合わせて、マールバハ図書館で資料調査を実施する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 亀井 一: Hybride Schnörkel oder rein ästhetische Arabesken? Jean Paul in der Ornamentdebatte seiner Zeit. In: Schauplatz der Verwandlungen. Variationen über Inszenierung und Hybridität. Hg. v. Kazuhiko TAMURA, München 2011, S. 199-214 査読有

2. 亀井 一: ジャン・パウルの死にどのような形をあたえたのか (第II報) - アレゴリーについて - 大阪教育大学紀要 (第一部門人文科学) 59 巻

2号 (2011) 15-26 頁 査読無

3. 亀井 一: ジャン・パウルの死にどのような形をあたえたのか (第I報) - 死の視覚的メタファーについての一考察 - 大阪教育大学紀要 (第一部門人文科学) 57 巻 2号 (2009) 1-15 頁 査読無

[学会発表] (計1件)

1. 亀井 一: Arabeske oder Web? - Zur Hybridität in Jean Pauls Texten 日本独文学会第51回文化ゼミナール 2009年3月27日 アートランドホテル蓼科

[その他]

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kamei/aesthetik.htm>

にて、関連参考文献を紹介している。